中村賢次さんの受賞作「春の野を焼く」（中村さん提供）



中村さん（崇城大教授）日展最高賞

日本画部門「春の野を焼く」



中村賢次さん

第119回日展で、崇城大芸術学部教授で日本画家の中村賢次さん(63)＝日展会員、熊本市＝の「春の野を焼く」が、日本画部門で最高賞の文部科学大臣賞に選ばれた。熊本県内で最高賞を受賞したのは、崇城大名誉教授で彫刻家の勝野眞言（まこと）さん以来2人目。中村さんは「同じモチーフを探り続けているのは人生で初めて。何かをつかみ始めているのかも」と喜びを語る。

1962年、熊本市生まれ。金沢美術工芸大大学院を修了後、京都で日本画家の故西山英雄さんに師事し、国重要文化財の保存修復に携わった。崇城大芸術学部が創設された2000年に帰郷し、後進育成の傍ら創作を続けている。25年に県文化懇話会賞受賞。

15、16年に続けて起きた阿蘇中岳の噴火と熊本地震。自然への「畏れ」をきっかけに熊本の風景を描き始めた。受賞作「春の野を焼く」は、4～5年前から通う阿蘇の野焼きがモチーフの大作。「以前は炎や噴煙そのものを追いかけていた」が、今年再び起きた大地震を受け、全体を捉える引きの構図で対象との距離の再考を試みたという。

審査員からは「大地を包む色彩の重なりが、季節の移ろいと共に再生への予感をも生み、やがて訪れる春への願いと、未来に向けた希望を感じる豊かな表現」と評価された。

同じ日本画部門で長女の妃菜さん(31)＝熊本市＝も特選に選ばれ、親子で高い評価を受けた。「自分の受賞はもちろん、娘の特選も驚きで、素直に喜べないところがある。これからやるべきことは実力の後付けです」と厳しい一面も見せる。

（澤本麻里子）